

谷崎潤一郎「鮫人」に見る林真珠の人物像

李 春 草

はじめに

谷崎潤一郎「鮫人」は、一九二〇年一月～十月（二月・六月・七月は休載）、雑誌『中央公論』に連載され、未完に終わった作品である。未完であるが、「谷崎潤一郎の作品系列の中で特異な質を持つものとして、しばしば評家の注目を惹いた^①」という伊藤整の指摘は適切だろう。発表当時、松崎天民はこれが「最大級」の「浅草文学^②」であると称賛し、「浅草礼讃小説」と位置づけた。また、野村尚吾はバルザックの「人間喜劇」を意識した上で生まれた作品であると指摘した^③。そして、大正時代に芽生えた民衆芸術という視座からの論説^④もある。その他、この時期における東西芸術に対する作家の内心の葛藤も論じられる。森山由美が指摘したように、この葛藤は大正時代の谷崎作品によく見られる一つの設定と言える。それは

相反する二つのタイプの芸術家を同時に登場させることである。^⑤

「金と銀」（「黒潮」一九一八・五）の青野と大川、「AとBの話」（「改造」一九二一・八）のAとBなどが例として挙げられる。

「鮫人」においても同じような設定がある。それは南画を志す南と洋画家志望の服部という二人の青年である。ところが作者はこの正反対の性格を持つ二人を対立させるのではなく、むしろお互いに認め合うように設定し、二人の対話を通じて東西芸術を論じた。そこに東西芸術の対立を超えて、それらを融合しようという作家の試みを窺い知ることができる。本論はヒロイン林真珠の人物造型、作品構成、登場人物の設定などを通して、東洋的特に中国的要素と西洋的要素の融合の実態を考察していきたい。

泉室潛織而卷綃、淵客慷慨而泣珠。（泉室に潜み織りて綃を巻く。淵客慷慨して泣きたるも珠なり。）

左思『三都賦』「吳都賦」（西晉二六五～三二六）

南海外有鮫人、水居如魚、不廢織績、其眼能泣珠。（南海の外に、鮫人有り。水に居ること魚の如し。織績を廢せず。其の眼は泣けば則ち能く珠を出だす。）^⑩

張華『博物誌』卷二・六九（西晉二六五～三二六）

南海之外、有鮫人、水居如魚、不廢織績、其眼泣則能出珠。（南海の外に、鮫人有り。水に居ること魚の如し。織績を廢せず。其の眼は泣けば則ち能く珠を出だす。）^⑪

干宝『搜神記』卷十二・三一一（東晉三二六～四二〇）

南海出蛟綃紗泉先潛織一名龍紗其価百余金以為服入水不濡。（南海で蛟綃紗なるものが産れる。龍紗ともいうが、百余金もする高価なもので、それで服を作れば、水中に入っても濡れることはない。）^⑫

昧勒国在日南、其人乘象入海底取宝、宿於鮫人之宮、得淚珠、則鮫人所泣之珠也、亦曰泣珠。（昧勒の国は日の南にあり。その人が象に乗りて海底に入り宝を取る。鮫人の宮に泊まり涙珠を得たり。即ち鮫人の泣く所の珠なり。）^⑧

まず小説「鮫人」の冒頭には唐・岑参の「送張子尉南海」（張子の南海に尉たるを送る）という五言律詩が掲げられている（原詩は第四章に引用されている）。初出では「鮫人」という言葉の傍らに○が付けられていることから、題名はこの詩から取ったと考えられる。しかし、鮫人とは如何なるものか、それが小説の内容とどう関連しているか明らかにするためには、まず鮫人に関する記録を探ってみる必要がある。

『広辞苑』^⑥の「鮫人」の項目には「中国で、想像上の人。人魚の類。南海に住み、常に機を織り、またしばしば泣き、涙はまろび落ちて珠となると伝える」とあり、『大漢和辞典』^⑦によれば、「水中に居るといふ怪しい人魚。海人の類。又、鮫人に作る」とある。つまり鮫人とは中国特有の存在であり、それに関する記載や説話が古典に多く見られる。

任昉『述異記』巻下・三〇七（南朝・梁四二〇～五八九）

また、唐・李瀚が編纂したとされる書『蒙求』の「淵客泣珠、交甫解佩」の節に

旧注引博物志云、鮫人従水中出、向人家寄住、積日売絹。臨去

従主人索器、泣而出珠、滿盤以与主人。今本無載。左思呉都賦云、泉室潜織而卷絹、淵客慷慨而泣珠。淵客蓋鮫人也。述異記曰、南海中有鮫人室。水居如魚。不廢機織。其眼能泣則出珠。（旧注に博物志を引きて云ふ、鮫人水中より出で、人家に向かひて寄住し、日を積み絹を売る。去るに臨み主人に従ひて器を求め、泣いて珠を出だし、盤に満たして以て主人に與ふ、と。今本には載する無し。左思の呉都の賦に云ふ、泉室に潜み織りて絹を巻き、淵客慷慨して珠に泣く、と。淵客とは蓋し鮫人なり。述異記に曰く、南海中に鮫人の室有り。水に居ること魚の如し。機織を廢めず。其の眼能く泣けば則ち珠を出だす。⑬

との記録もある。その他、『文選』（蕭統編 唐・李善注 梁五〇二～五五七）第十二卷「江海」「江賦」に「淵客築室於岩底、鮫人構館於懸流」（郭景純）（淵客室を巖底に築き、鮫人館を懸流に構ふ）、「海賦」に「其垠則有天琛水怪、鮫人之室」（木玄虚）（その垠には即ち天琛水怪、鮫人の室あり）、『太平御覽』（李昉・李穆・徐鉉編

北宋九六〇～一二二七）巻七九〇に「鮫人従水出、寓人家、積日売絹。将去、従主人索一器、泣而成珠滿盤、以与主人。」（鮫人は水より出で人家に寓す。日を積みて絹を売る。将に去らんとして主人より一つの器を求め、泣きて珠を成し盤に満たすことを以て主人に与ふ。）とある。⑭

唐代以降の漢詩や小説に描かれた鮫人は、概ね以下のようなイメージを持っている。例えば、唐・杜甫の「雨」に「女神花鈿落、鮫人織杼悲」（女神花鈿落つ、鮫人織杼悲し）、唐・康翊仁「鮫人潜織」に「機動龍梭躍、絲縈藕滓添」（機動き龍梭躍り、絲縈り藕滓添ふ）、唐・無名氏「天竺国胡僧水晶念珠」に「紅精素貫鮫人泣」（紅の精、素と貫き鮫人泣く）、唐・劉禹錫の「莫徭歌」の「市易雜鮫人、婚姻通木客」（市易は鮫人に雜え、婚姻は木客に通ず）、唐・李欣の「鮫人歌」に「鮫人潜織水底居」（鮫人、潜かに織るは水底に居る）、宋・陳與義の「次韻家弟碧練泉」に「鮫人暗動卷絹梭」（鮫人暗に動きて絹梭を巻く）、宋・張玉娘の「香闌十詠鮫絹脫」に「半幅生絹雪色寒、鮫人相贈比琅玕」（半幅の生絹は雪色にして寒く、鮫人の相贈るや琅玕に比す）、元・楊維禎の「鮫人曲」に「鮫人夜飲名月映、夜光化作眼中珠」（鮫人、夜飲み名月映く、夜光、化作して眼中の珠なり）、金・李俊民の「中秋」に「鮫室影寒珠有淚」（鮫の室は影寒くして珠に涙あり）などである。⑮

これらの典拠に基づいて書かれた小説に、清・沈起鳳の「鮫奴」がある（小説集『諧鐸』（一七九二年）に収録）。あらずじは次のとおりである。

——昔、景生という青年がいて、旅先の閩（福建省あたり）から帰郷する途中、砂浜に人のようなものが寝ているのを見た。近づいてみると、目が緑で、龍のような鬚を生やし、真つ黒な肌をして鬼のようである（原文「碧眼螭鬚、黒身似鬼」）。何者かと尋ねると、鮫人であると答えた。龍宮で鮫納紗を織っていたが、小さな罪を犯して追放されたという。景生は家まで鮫人を連れて帰った。鮫人は特殊な能力があるわけではないが、毎日池で水を浴びることを好んでいた。灌仏の日に景生はお寺で愛珠という美しい少女を見そめた。だが、彼女の家人が「万粒の真珠」を結納に求めていることを知り、途方にくれた彼は重い恋の病にかかり、次第に死期が近づいてきた。瀕死の主人を見て鮫人は悲しい涙を流した。不思議なことにその涙が珠となった。それを見た景生は急に元気を取り戻し、鮫人に頼んで一万粒の涙を泣かせてめでたく念願の女性を娶った。鮫人は龍王の赦免を得て懐かしい故郷に帰った。——

この小説を粉本として書かれたのは、滝澤馬琴『戯聞塩保余史』に収録されている「鮫人」である^⑧。主人公や舞台などはすべて日本化されたが、鮫人の容貌に関する描写は原話とほぼ同じである。

谷崎潤一郎「鮫人」に見る林真珠の人物像

ある日、瀬田の橋をわたりけるに、かたはらなる砂の上に、一個の漢子眠居たり。その形状ミるに、碧の眼、鱗の鬚、満身、墨のごとく黒くして、鬼に似たり。喚起して、何者ぞと問へば、そのもの対て、我ハ海中の鮫人なり。^⑨

以上に挙げた中国古典とその影響を受けた日本の物語に描かれた鮫人は、人間世界のものではなく、異世界から来た一定の神性を帯びる伝説上のものである。彼らは海底に暮らし、高価な（鮫納）（薄絹の類）を織って、泣けば真珠の涙を流すという。また鮫人は助けた人間に恩返しをするところから人間と似たような感情を持っている。

ところが、その容姿に関する描写は極めて少ない。沈起鳳の「鮫奴」と馬琴の「鮫人」においては、男性であるように描かれたが、中野美代子によれば、「その性別は必ずしも一定していない、ところが、漢代を過ぎて三世紀の三国時代からいわゆる六朝時代になると、この鮫人が南の海底で機織りをしているとか、泣くと涙は真珠となるとかいうふうには、明らかに女性化していくのである」^⑩。

二

さて、鮫人伝説と谷崎作品とにどのような関連があるか。まず鮫人が目から真珠の涙を流すというイメージは、その名の響きからし

て作品のヒロイン林真珠を容易に想像させる。その名前は日本人にしてはあまりにも奇妙であるため、はじめて「真珠」という名前を聞いた南は、

林真珠と云ふ名前も、偶然の暗合と云へばそれ迄だけでも、日本人の女の名にしては妙ぢやないか。^⑭
と違和感を持つ。

肌が真珠色をしているため「真珠」の芸名が付けられたというが、偶然の暗合自体がすでに興味深い。また名前のみならず彼女に纏わる事件が、さらにその（鮫人）的な性格を浮き彫りにする。

それは北斗劇団の上海巡業時、『水滸伝』の浪子燕青を演じた林真珠が、会場外から入り込んだ支那人の苦力の老人に脅かされて卒倒したという出来事である。美少年燕青に扮した林真珠が、老人の行方不明中の息子林真珠（リンチェンチュウ）と名前のみならず、容貌まで似ていたため、老人は興奮して暴れたのである。

真珠よ、真珠よ、お前はやはり私の悴だ。お前は決して女ではない。女の風をして世を欺き、私たち親子を見捨てゝる気なのだ。

いくら隠しても私にはちゃんと分つて居る。お前は何と云ふ薄情な子だらう！^⑮

浅草歌劇団の女優林真珠はなぜ老人の息子と思われたか、その時の舞台衣装については次のように書かれている。

これは後で聞いた話だが、支那人達の間では燕青になった役者が一番い、顔の作りにも何処となく支那人らしい趣があり、衣裳も一番よく似合ひ、どう見ても支那人の美少年だと云ふので感心した者が多かつたさうだ。のみならず彼等の殆ど総べてがしまひまで真珠を男だと思つて居た。^⑯

林真珠は見事に観客の目を欺いて男性を演じていた。彼女は少女でありながら少年としての美も持つ、性別がつかぬ曖昧な存在のようである。その身元は、もともと東京の旧家であり、落ちぶれて深川の猿江に住むようになったというが、上海での老人の突然の出現に対する反応から見れば、何かの隠し事があると考えられる。当時の事情について次の描写がある。

唄の文句が例の『薄情郎君何日到。』のところへ来た時に、又してもあの老人のほーおツと云ふ奇妙な叫びが、前よりもずつと微かに、舞台裏の余程離れたところで訝の如く響いた。さうしてそれが響くと同時に、天井へ向けられた真珠の顔は更にぐつと仰向きになり、瞳はからくりが止まつたやうにうつと一つ所に漂ひ、喉からは声が出なくなり、手は力なく両方へ垂れた、——が、それもほんの一瞬間であつた。次の瞬間にはドタンと云ふ音が立て、彼女は仰向きに打つ倒れた。^⑰

追い払われた老人は劇場の外から再び中国語で罵っていた。日本

人には意味が分からなかったが、それを聞いた林真珠が突然卒倒したのは不思議に思われる。彼女が中国語を解するか解さないか、作中では曖昧に扱われている。

ここで注目したいのは彼女が卒倒する直前に歌った「漁家傲」という曲である。

一別家郷音信查、一たび家山に別れてより音信は、
百種相思、百種の相思、

腸断何時了。腸断何れの時にか了らん。

燕子不來花又老、燕子來らず花も又古い、

一春瘦得腰兒小、一春瘦せてきて腰兒も小し。

薄幸郎君何日到。薄幸の郎君何れの日にか到る、

思自当初、思う当初より、

莫要相逢好、相逢うを要むること莫かりせば好からんと、

好夢欲來還又覺、好夢成らんと欲て還つて又覺むれば、

綠窓但覺鶯啼曉。綠窓に但鶯の曉に啼くを覺ゆるのみ。⁵⁸

これは明・施耐庵の『水滸伝』第八十一回「燕青月夜遇道君 戴宗計出楽和」（燕青月夜に道君に遇い、戴宗計を定めて楽和を出す）の二節。美少年燕青が歌伎李師師のところへ宋の道君皇帝のために歌った曲である。遠く郷里を離れて花柳界に落ちぶれた一人の女性の心境を描いている。故郷を離れて家族との音信が途絶えた女

性は、国や親族のことを思うたびに、腸がちぎれるほどの悲しさがこみあげてくるという。林真珠はこれまでと違つてこの曲だけを「純然たる支那語で、支那風のメロディーを入れて歌つた。ちょうどその時老人の喚き声を聞いて卒倒した。それは、親族と再会してその不幸な運命と悲惨な過去が思い出されたからか、それとも本當の身分が暴かれるのを怖がつていたからかは知る由もないが、事件自体が興味深い。林真珠は日本人の少女か中国人の少年かという謎に包まれてくる。

その他、林真珠と老人の娘林瑤娟の「容貌その他に於ける不思議な類似に驚かない者はなかつた」。その名前も不思議に類似している。「瑤娟」は美しい玉が娟麗であることから、貴重な真珠と同様のものだという隠喩である。また林真珠の衣裳を「白い薄地の絹」や「ミルク色の羅」などとした設定は鮫人が絹を織つたことを想起させる。さらに、その住居は「河岸通りにあつた」「洒落た住居」であり、「裏手が直ぐと大川の水に面して」いる。「往来からは二階家であるが中に這入ると河縁の方が三階になつて居る。林真珠はこの河縁の地下室に住んでいる。そこは河に一番近い部屋で、ある意味で陸から水に入る中間地帯でもあり、陸と水を往来するには最も都合のいい場所でもある。彼女が深夜になると人目を避けて部屋を離れたという不思議な行動はいつとき人間世界に交じりながらも

結局水中に戻ったという鮫人に関わる伝説を暗示しているだろう。

以上分析してきたように、題名の〈鮫人〉は浅草の人気女優林真珠を暗喩しているだろう。ところが、〈鮫人〉という言葉は冒頭の漢詩に見出されるほか、作品に一度も見られない。作者が歌劇団の女優たちを比喩する際、〈鮫人〉ではなく〈人魚〉という言葉を使ったところに注目したい。たとえば作品に次のような文句がある。

日本近代の産物たる此の愛すべきオペラの人魚どもは、浅草に住みながら恐らく「大金」や「草津」の有難味も知らないであらう。²⁶

ここには単なる言葉の選択ではなく、その言葉を使った文化的背景そのものがあると考えられる。〈鮫人〉よりも〈人魚〉に関する記録またその伝説は実に広く、世界各国にわたっている。さて、作中に描かれた「オペラの人魚ども」は如何なる人魚伝説に関わるだろうか。日本従来の人魚伝説のみならず、大正時代に流入した西洋の人魚伝説も考察する必要がある。

三

日本の人魚伝説に関して、九頭見和夫の『日本の「人魚」像——『日本書紀』からヨーロッパの「人魚」像の受容まで』²⁷によれば、日本における人魚伝説は清寧天皇五（四八〇）年の「八百比丘尼人

魚を食う」といった伝説に遡る。その後の人魚の記録は、奈良時代の『日本書紀』から江戸時代の『六物新志』まで、様々な歴史書や随筆や博物書によく見られる。そして、井原西鶴「命とらるる人魚の海」や山東京伝「箱入娘面屋人魚」や曲亭馬琴「南総里見八犬伝」などの小説にも現出する。ところが、江戸時代まで古典に描写された人魚像は、中国『山海経』²⁸、『史記』²⁹、『本草綱目』³⁰から大いに影響を受けたものである。その多くは本草学の領域に属し、人魚の医学的効能が強調された。或いはその膏を灯油に使えば、なかなか消えないなどと伝わっていた。いっぽうで日本独自の発展も見られる。例えば、人魚の肉を食べると〈不老長寿〉になるとか、吉凶の前触れと捉えられるなどである。このような日本の従来の人魚像は、作品中の〈人魚〉特にその中心的な存在である林真珠との関連が薄い。作中の林真珠はあくまで魅力に溢れた美少女として描かれていた。その容姿について次のような描写がある。

それは南が先舞台裏で見た通りの、白い寛やかな衣装を着けた、優雅な手足を持った円顔の少女だった。明るいついで見る容貌は先より数段美しく思はれたが、此の少女の人を魅する力は顔立ちよりも寧ろ全身の肉と骨とを蔽ふ奇妙に滑かな皮膚の色つやにあつた。自分でもそれを知つて居るのか襟から下には少しの白粉気も施してないのに、冷たい感じがするほど青白く冴えた肌には曇り

硝子を日に透かしたやうな幽かな深い光沢があり、且つその光沢に怪しい潤ほびを添へて居るものは、腕、肩、脚のところどころに縞子の目の如く密生して居る銀色の虬毛であつた。その細かな而も燦然と生え揃つた虬毛の部分は日本人よりも西洋人の肌に近く、明りに反射すると猫や海豹の毛皮を連想させ、無邪気な顔の表情と対照すると艶麗ではあるが一種の鬼気を帯びて居た。人は恐らく此の顔と此の皮膚との神秘的調和に惹き付けられることであらう。³¹⁾

彼女は西洋人のような肌を持つており、無邪気ながら人を魅する力を備えている。観客のみならず周りの男性も皆彼女の虜となつた。服部が浅草を離れない理由の一つは彼女のためであつた。彼は林真珠に対する思いを友人の南に次のように打ち明けた。

公園の奴等には秘密なんだが、君だから白状しちまはう。実は惚れて居る以上なんだ。あの女の児の顔を見ないぢや僕は生きちや居られないんだ。あの児の傍に居さへすりやあ僕は今にきつとい、絵が画ける。³²⁾

舞台姿の林真珠に見惚れている服部は、その「眼つきの裏にこそ、彼の憧れつつある永遠なものが影を宿して居る」。服部のみならず団長の梧桐寛治も林真珠の不思議な美しさに惹かれた。

「今日は一つ遠廻しに聞いてやらう。」——さう思つては居たの

谷崎潤一郎「鮫人」に見る林真珠の人物像

だが、その決心は真珠の顔を見ると同時に消えて行つた。其の上、真珠のふざげ方はいつでも妙に執拗い馴れ馴れしいものだつた。其れでなくても女好きの梧桐は、さうされると一種抵抗し難い魔力で縛られるやうに感じた。³³⁾

林真珠は普通的美貌より魔性に近い妖艶な美貌の持ち主である。特に夜の浅草を舞台に妙なる歌声で多くの男性の心を迷わせる不思議な魅力を持つている。これはヨーロッパに伝わるライン川を航行する舟人を誘惑し溺死させるローレイ伝説や、美しい人魚との愛を求めするために魂を捨てたワイルドの童話「漁師とその魂」を連想させる。

ヨーロッパには「ローレイ」伝説を扱う文学作品が少なくないが、その中でハイネの詩は一八九一年五月「ロオレイ」という題名で雑誌「海潮」に日本語訳されたという。³⁴⁾ 全詩を左に掲げる。

涙こぼれぬいかなれば、心かなしく胸痛む

ふりにし時の物語 思ひ出されてあはれ也

あたり涼しく暮れ初めて 「ライン」の流れ静なり

入日まはゆく夕栄へて 山のいたゞき照らしける

婀娜なる乙女笑みつ、も 彼方の岩にた、ずめり

皓齒金髪薔薇の頬 錦の装ひか、やきぬ

黄金の櫛もて梳りつ、 歌へる調の聲清く

雲の足をや止むらん
空ふく風もやみぬへし

此処漕き下る舟人は
心奪はれ氣も融けて

危き暗礁をも打忘れ
嬌態に媚ふるぞあはれなる

さかまく波は鱷の口
舟諸共に吞まれけり

これぞ謎の終りなる
多情多恨口オレライの歌³⁵

ライン川の美しい乙女ローレイは、その怪しい歌声で人々の心を揺さぶり、聞き惚れた舟人を死に追いこむ。それと同じように流動する夜の浅草の〈海〉で歌劇団のソプラノ林真珠は、妙な歌声と不思議な魅力を以て多くの人を誘惑した。彼女が登場すると、人氣が沸騰する。

彼女は別に歌をうたふのでもなくむづかしい台辞があるのでもなく、ただ其処に出て居るだけで、出てさへ居れば観客は此の少女に歓呼を浴びせた。³⁶

また、童話「漁師とその魂」はワイルド第二の童話集『A House of Pomegranates』に収録され、一八九一年に発行された。日本においては本間久雄によって翻訳され、『栢榴の家―ワイルド童話集』というタイトルで一九一六年に春陽堂より刊行された。その中の一節を引用する。

一日一日と彼女の歌声は彼れの耳に快く響いて来ました。そしてその歌声が餘りに快く響いたものですから、彼れはとうとう自

分の網を忘れ、自分の手業を忘れて、自分の職業などはもうどうでもよいやうになつて了ひました。(中略)

「一體、俺の魂は俺に取つてどんな用をするといふのだ？俺は魂を見ることが出来ない。魂に觸れることも出来ない。魂を知ることが出来ない。俺はもう身體の中から魂といふ奴を投げ出してはふ。さうすると、却つて喜ばしいことが澤山おこるに相違ない。」と。

漁師は美しい人魚に魅せられ、彼女への恋を叶えるために、人魚の言い付け通りに人間としての魂を捨てた。これは林真珠に対する服部の気持ちと類似している。

君の知つて居る通り僕は我ながら愛憎が尽きるほど意志が弱いんだ。誘惑され、ば直ぐに悪魔に魂を売る意気地なしなんだ。うまい酒があればほんの一杯でも買収されちまふし、惚れた女になら指一本で自由に動かされる。³⁷

林真珠の人物像から考えれば、谷崎はこれらの書物を読んでいたことはほぼ間違いない。特に一九一八年に書いた小説「人魚の嘆き」の貴公子・孟世壽が美しい西洋人魚のとりことなり、莫大な財産を払つて人魚を入手した設定は、「漁師とその魂」の話と類似している。谷崎は東西の人魚伝説に刺激され、自分なりの想像を付け加えて、様々な要素が絡み合った林真珠のような人物を作り上げた

と思われる。

四

作品の設定でもう一つ注目したいのは、服部と南の二人の登場人物である。墮落した青年画家服部は、近代都市になりつつある東京に対して不満を抱き、慰藉を求めするために浅草に逃げてきた。ところが、近代化した東京を批判する傍ら、西洋から入ってきた活動写真や歌劇などといった各種の娯楽に耽溺し、浅草にますます夢中になっていく。もう一方、山手の教養のある家庭で生まれ育ち、支那趣味の父の供をして中国を漫遊してきた南は、中国旅行を通じて東洋芸術の偉大なる美に目覚め、油絵をやめて南画を習得することに腹を決めた。二人はそれぞれの芸術理念を持ちながら、それぞれが主張する芸術の境地に到達しようとする。二人は趣味や理想を異にするが、対立関係ではなく、むしろ互いに「この世で信じてくれる唯一の友人」である。再会した二人は、それぞれ自分の求める芸術の境地について語り合った。特に作者は南を通して東西芸術について長々と述べている。

東洋の芸術と西洋の芸術とは形式が違ふばかりでなく、根本の精神が違つて居るから。一と口に云へば、西洋では次から次へと常に新しい美をクリエートして行く、自分で自分独得の美の世界

谷崎潤一郎「鮫人」に見る林真珠の人物像

を建設する、有らゆる方面へ美を分化させ発達させる、其処に芸術の目的があり芸術家の生命がある。ところが東洋の芸術は美をクリエートするのでなく美を暗示すればいいのだ。東洋人の考へて居る美は、暗示するより外に形で現はしやうのないものなのだ。つまり西洋人の考へて居る美の種々相のもう一つ奥にあるたつた一つの美、——美の真髄とも云ふべきもの、——たゞ其れだけを東洋人は狙つてゐる。(中略)だから東洋では水滸伝や紅樓夢よりも李太白の五言絶句の方が貴い。李太白は僅か二十字の詩でもつて、ダンテやゲーテの領域へ一と息に行き着くことが出来る⁸⁾。以上は南の芸術観であると同時に、作者のその時期における美に対する思考でもあろう。谷崎は「鮫人」を発表する前年、雑誌「雄弁」にエッセイ「或る時の日記」を書いた。そこでもほぼ同じような芸術論を述べている。

東洋——主として支那——の芸術では、「美」を通じて「虚無」に到達することを目的とする。或は「虚無」が即ち「美」であると云つても差支へはない。また「虚無」と云つて悪ければ、仏教の涅槃の觀念に似た宗教上の絶対境——永遠の世界——である。だから「意は言外に在り」で、其処に現はされたものよりは隠されたもの、方に「美」が存在する。支那文学の精髓とも云ふべき唐詩は最も其の模範的なものであらう。(中略)ところが西洋で

は何処までも「美」其物に目的を置く。芸術家は新しい美を創造すること、クリエイトすることが大切である。「美」を通じて、なく「美」それ自身のうちに永遠の生命を認め、「美」それ自身に魂を託して彼等は解脱しようとする。(中略)東洋の美の観念は単一不動のものであるが、西洋の美の観念は地上の生命の流れと等しく永久に活動し、分化し、発達する。³⁹⁾

谷崎の芸術論はその時期の映画体験と中国旅行からの刺激を受けたものかどうかは確実に言えないが、まったく無関係だとも断言しかねる。谷崎の芸術論を実践に移し創作した小説が、まさにこの「鮫人」ではなからうか。「中国文学の真髄は唐詩であり、僅か二十字の詩でもつて、ダンテやゲーテの領域へ一と息に行き着くことが出来る」という意識のもとに、小説「鮫人」のエピグラムを漢詩にしたのだろう。その漢詩と小説内容とは一体如何なる関連性を持つだろうか。エピグラムの漢詩は唐・岑参の「送張子尉南海」である。その内容は次のようなものである。

不扞南州尉 南州の尉を選ばざるは
高堂有老親 高堂に老親有ればなり
楼台重蜃氣 楼台 蜃気重なり
邑里雜鮫人 邑里 鮫人雜はる
海暗三山雨 海は暗し 三山の雨

花明五嶺春 花は明らかなり 五嶺の春

此郷多宝玉 此の郷 宝玉多し

慎勿厭清貧 慎んで清貧を厭ふ勿かれ⁴⁰⁾

これは南海へ赴任する友人の張子に贈った饑別の詩である。岑参はこの詩において南海地方は蜃気楼が重なって現れたり、村里には鮫人がまじっていたりする怪しいところであると述べた。そこは常に氣候が悪くて、雨が絶えず降り三山を籠めて海上をうす暗くする。しかし、この地方はもともと宝玉の多いところであるため、必ず清貧の境涯を厭うことなく、いつまでも廉潔な役人であるようにと友人に忠告した。南海は、中野美代子が指摘したように、「暗くおそろしいもので」、「流刑の地、あるいは絶望的な左遷の地だった」。その一方大陸を離れるほど「エキゾティズムもかきたてられる」⁴¹⁾地方でもある。

南海は中国内陸に対して周辺的かつ後進的な地域であり、エキゾチシズムに満ちた別世界でもある。これに対して、作品中の浅草は次のように描かれた。

彼(南)は歩きながら、自分が始めて足を踏み入れた其の辺の町、——曖昧な、下品な、低い小さな家ばかりがごたごたと押し合つて居る其の辺の露地の匂ひを嗅いだ。さうして其処に、そのじめじめした濁つた空気と服部の生活を結び付けて、或るぼん

やりした好奇心を起さずには居られなかつた。(中略)たまにこんな所へやつて来ると、都会の暗黒面に潜む町の様子が、全く別世界へでも来たやうな心地を覚えさせるのである。彼はふと、去年の十一月の或る日の暮れに、父につれられて南京の秦淮の町をさ迷つたことを思ひ出した。⁴²

西原大輔は「江戸趣味と支那趣味」(月刊アーガム)一九九七秋季号)において、植民地と下町はその後進性という点で共通していると述べ、「鯨人」において谷崎は浅草と中国を結びつけて同一の地平に据えたと指摘した。その後進性から浅草と当時植民地だった中国は類似しているが、同じような視点から東京の中の浅草と中国の中の南海とも共通すると言つてもいいだろう。そして様々な西洋文化が流入し、上演されたことから、浅草は東京において最もエキゾチックな場所だったといえよう。

さらに南海は宝玉の名所であるのに対して浅草は食べ物や女色の歓楽の地である。いずれも人間の欲望を掻き立てる場所と言える。

しかし清貧を厭わないようにという詩人の忠告に反して、服部は日々浅草で食物や女性に耽溺して墮落のどん底に落ちぶれた。こうしてみると、「鯨人」における人物造型、舞台設定などは、エビグラムの漢詩に凝縮され、まさに「僅か二十字の詩でもつて、ダンテやゲーテの領域へ」と息に行き着くことが出来たのである。

谷崎潤一郎「鯨人」に見る林真珠の人物像

おわりに

本論は「鯨人」における東洋と西洋からの影響を考察した。ヒロイン林真珠の人物設定と描写を中心に、その人物像と中国の鯨人伝説と西洋の人魚伝説との関連性を検討することを試みた。林真珠は鯨人と人魚の合体であり、その「混血児」のように設定されたことから東西芸術を融合しようという作者の創作意図が窺われる。

ところが、もともと「千枚位、少なくとも七八百枚」を書くつもりだったこの作品は作者の「最後まで必ず書き通す決心」⁴³に背いて結局未完のまま終わった。その理由について、「何分活動の方をやつてみると長い物に取りつく余裕がなし、気分が統一されないので弱つて居ます」⁴⁴という作者自らの釈明があるが、そう簡単に片付けられない。谷崎は、ヒロインを両性具有、東西合体のような人物に設定した結果、謎に包まれた物語をいかに展開するかという難題に直面したのではないか。

「鯨人」は、東西芸術に対する作者の葛藤、および、その解決を試みた作品とみられる。作品の中絶はこの試みが結局失敗したことの意味しているだろう。失敗ではあったが、後に谷崎が関西移住をきっかけに〈新しい東洋〉として〈古い日本〉に目を向けることを考えると、一九二〇年代における谷崎の関心の所在が窺われる作品

としての価値を持つ。

注

- ① 伊藤整『谷崎潤一郎全集』第九卷「解説」(中央公論社 一九五八・十一)
- ② 松崎天民「過去の千日前とこれからの浅草」(『中央公論』一九二〇・七、夏季特別号)
- ③ 野村尚吾『伝記谷崎潤一郎』(六興出版 一九七二・七) 234頁
- ④ 生方智子「谷崎潤一郎『鮫人』における『民衆芸術』のモダニティ」(『立正大学人文科学研究所年報』別冊 十八 二〇一一)
- ⑤ 森山由美「谷崎潤一郎『鮫人』小論——東西両芸術をめぐる作者の意識を中心に——」(『方位』13 一九九〇・八)
- ⑥ 新村出編『広辞苑』第六版(岩波書店 二〇一一・一)
- ⑦ 諸橋轍次『大漢和辞典』卷十二(大修館書店 一九九〇・三)
- ⑧ 拙訳
- ⑨ 拙訳
- ⑩ 竹田晃・黒田真美子編 佐野誠子著『中国古典小説選2 搜神記・幽明録・異苑他』(明治書院 二〇〇六・十二)
- ⑪ 注⑩に同じ。
- ⑫ 中野美代子『中国の妖怪』(岩波書店一九八三・七)による。140頁
- ⑬ 早川光三郎『新釈漢文大系58 蒙求・上』(明治書院 一九七三・八)
- ⑭ 高橋忠彦『新釈漢文大系81 文選(賦篇)下』(明治書院 二〇〇一・七)
- ⑮ 拙訳
- ⑯ 黒川洋一『杜詩』第七冊(岩波書店 一九七三・六)

⑰ 拙訳

- ⑱ 増子和男「鮫人泣珠考」(『村山吉広教授古稀記念中国古典学論集』汲古書院 二〇〇〇・三)による。
- ⑲ 武藤禎夫編『断本大系』第十三卷 瀧澤馬琴「新作塩梅余史」264頁
- ⑳ 中野美代子『中国の妖怪』(岩波書店 一九八三・七) 138頁
- ㉑ 『谷崎潤一郎全集』第七卷(中央公論社 一九八一・十二) 185頁
- ㉒ 注⑱に同じ。184頁
- ㉓ 注⑱に同じ。165頁
- ㉔ 注⑱に同じ。170頁
- ㉕ 駒田信三訳『水滸伝』下巻『中国古典文学全集・第十二巻』(平凡社 一九六一・二) 265頁
- ㉖ 注⑱に同じ。244頁
- ㉗ 九頭見和夫『日本の「人魚」像——『日本書紀』からヨーロッパの「人魚」像の受容まで』(和泉書院 二〇一一・三)
- ㉘ 『山海経・北山経』(先秦以前22)「龍候之山、無草木、多金玉、決決之水出焉、而東流于河、其中多人魚、其状如帝魚、四足其声如嬰兒。」(さらに東北へ二百里、龍候山といい、草木なくて、金玉が多い。決決の水流れて東流し河に注ぐ。水中に人魚多し。其の状は帝魚(山椒魚)の如く、四つの足、其の声は嬰兒のよう。)引用文の出典:『中国古典文学大系8 抱朴子・列仙伝・山海経』(平凡社 一九六九・九)
- ㉙ 『史記 秦始皇本紀第六』に「以人魚膏為燭、度不滅者久之」(人魚の膏を以て燭と為す。滅えざる者之を久しうするを度ればなり。)『新釈漢文大系 第三八巻 史記(一)』(明治書院 一九七三・二)
- ㉚ 李時真『本草綱目』に人魚を「てい(魚編に帝魚)と「鮫魚」と解釈し、その医学的効能を論じていた。引用文の出典:白井光太郎・鈴木真海『国訳本草綱目 第十冊』(春陽堂 一九三〇・十一)

- ③① 注②に同じ。161頁
- ③② 注②に同じ。147頁
- ③③ 注②に同じ。227頁
- ③④ 注②に同じ。
- ③⑤ 「ロオレライ」ハイネ著 踏青軒主人訳「海潮」第一号（一八九一・五・一五）
- ③⑥ 注②に同じ。130頁
- ③⑦ 注②に同じ。115頁
- ③⑧ 注②に同じ。107頁
- ③⑨ 『谷崎潤一郎全集』第二十二卷（中央公論社 一九八三・六）89頁
- ④① 目加田誠『新釈漢文大系19 唐詩選』（明治書院 一九六七・二）
- ④② 中野美代子『中国の妖怪』（岩波書店 一九八四・十二）140頁
- ④③ 注②に同じ。90頁
- ④④ 谷崎潤一郎「鮫人附記」（『中央公論』一九二〇・一）
- ④⑤ 谷崎潤一郎「不幸な母の話」の文末に瀧田樗陰宛に書かれた短文による。（『中央公論』一九二一・三）

〔付記〕 本稿で引用した谷崎潤一郎の文章は、『谷崎潤一郎全集』全三十三卷（中央公論社 一九八一・五・十五頁～一九八三・十一・十）を底本とする。引用に際し、ルビを簡略化し、旧漢字を適宜に新漢字に改めた。また、引用した中国古典は、日本語訳が見当たらない場合、論者の拙訳を用いた。